

令和6年度 学校評価部会・学校運営協議会及び地域連携部会・教育活動活性化部会

令和7年3月 12 日(水)14:00 ~ 15:30

神奈川県立旭高等学校 会議室

委員:渡邊 道子(産業能率大学入試企画課長)(会長)、新井 好美(PTA 会長)(副会長)

小宮 智(横浜薬科大学教職課程センター教授)、増田 嘉一郎(旭ロータリークラブ)

北瀬 淳子(川井地域ケアプラザ所長)、市川 慎二(希望ヶ丘幼稚園長)

校長:梅田 俊輔 副校長:小松平 由美子 教頭:渡辺 克己

教員:田中 成美(教務 G)、金澤 佳子(生活指導 G)、豊田 耕平(生徒支援 G)

高野 淳(管理運営 G)、佐々木 悅郎(キャリア支援 G)、深見 健(広報 G)

○学校評価部会(14:00~14:40)

1. 開会(渡辺教頭)

2. 校長挨拶

公立の中学校の卒業式は本日行われ、午前中に近くの都岡中学校の卒業式にいってきた。3月3日には本校も卒業式を行い、299名の卒業生を出した。生憎の天気ではあったが厳粛な式が行われた。入れ替わりに53期生318名が入学する。明日入学前説明会が行われる。今年の卒業生は50期、節目の年となる。今年の入学生が3年生のとき新校の一期生となる。カリキュラムとしては現在の旭高校のままだが、卒業するときは新校となる。令和7年度中に様々なことを決めていかなければならない。ワーキンググループを作りさまざま動いている。設置基本計画は今年の夏に確定する。一人一台端末のICTを活用した授業、探究の授業、地域の教育力を借りて地域連携をし、世代間を超えた、国際教育、スポーツ、体育に特化したイベント、部活、共生などをキーワードにして新校に向けて準備していく。またなびや基金という制度を活用し、本校の卒業生ナノ・ソルテックの社長の増田さんが総額1000万ほどの寄付をしてくれている。中庭の整備などをしていったが、今回は体育館にスポットライトの設置をした。知事から増田さんに感謝状も贈呈された。

3. 報告・協議

【一年間の目標・取り組み】

田中教諭(教務 G)

○教育課程については、新校を見すえている。ICTを活用した協働的な学び、個別最適化した学びを目指している。授業評価については、第一回より第二回の評価が高かったが、授業以外での意識の改善にはつながっていない。ICTについては教員間の力量の差もあり、評価も低いところがある。来年度からは具体的に示し改善していきたい。

渡邊様(産業能率大学入試企画課長)

質問①教員間の差について対策は行っているか。

→回答①田中教諭(教務 G)

- ・放課後に全教員を巻き込み、30 分など短い時間でアイデアの提起をしたり、やりたいことはあるけどやり方がわからない人へ示していったりしている。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

質問②カリキュラムにおいて具体的にどういう課題があるか。また、授業改善にテーマなどがあるのか。

若い先生は使っていると思うが、それを見に行かせたり発表させたりする場があるか。

→回答②田中教諭(教務 G)

- ・進学に力を入れている中で文転、理転など方向転換ができるように、授業の単位数や設置学年など検討していくこと。
- ・ICTについては、何を使うかより、ICTを使ってなかなかクラス全体ではできない、個別最適化の学びや、協働的な学びをテーマとして行った。例えば、ロイロノートの活用などを各教科からデータを提示し、この教科でもこんなことができるのではないかを考えさせる場を作った。

金澤教諭(生活指導 G)

○3年前から比べると生徒の状況などが大きく変わってきた。指導件数が多くなっているのと、生徒が抱える問題が変わってきていている。指導については学年ごとのルールでやってきたが、学校として統一を図った。入学当初からしっかり示すことが課題である。支援については、「かながわサポートドック」により、生徒が抱える問題が視える化し、SC,SSWとの連携がしやすくなり、個々のニーズにあった対応ができるようになった。SC,SSWにうまく繋げられない生徒もいるので、話しやすい環境づくりをしていきたい。

豊田教諭(生徒支援 G)

○昨年度の5月までコロナの制約があった。さらに文化祭後体育館が使えなくなる中、どうやって生徒主体の活動ができるかが今年一年の課題だった。コロナ禍で活動ができず、生徒にノウハウが受け継がれていない。文化祭などは、運営委員を作り、半年前から準備を進めてきた。表で楽しく活動できるためには裏方が大事であることを意識させる指導してきた。ボランティアの集まりがあまりよくなかったので、どうすればもっと地域と連携できるか考えていく。しかし、概ね生徒がよく動いてくれた一年だった。

梅田校長

○「かながわサポートドック」とは神奈川独自の取り組みで、全県で年2回アンケートを取る。きっかけは中高生の自死への対策である。県が2億円近くかけて導入した。相談待ちではなく、なかなか相談してくれない生徒のために、こちらから踏み込んでいくことで生徒の悩みを知ることができる。これによりノーマークだった生徒に個別対応できるようになった。始めてから県立高生の自死が減っている傾向であるため、効果があったのではないか。本校は予兆傾向にある生徒が少ない。不登校について、小中学校で不登校の数が過去最多である。コロナがきっかけで高校にも波及してきている。特に理由なく学校に来られない生徒が増えている。対策としてオンラインなどの

通信教育など柔軟な単位認定を行っていく。他県では学校に丸投げが多い中、神奈川は対応マニュアルがある。国家の危機のため今後こうした流れが普通になっていくのではないか。

渡邊様(産業能率大学入試企画課長)

質問③ボランティアは全体の何%か。

→回答③豊田教諭(生徒支援 G)

・本当に少ない。参加生徒はしっかりやっている。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

質問④「かながわサポートドック」とはLINEのようなもので行うのか。

→回答④梅田校長

・県が業者に委託して回答している。質問はほぼ全校で同じ。運用については各学校で異なる。

北瀬様(川井地域ケアプラザ所長)

質問⑤「かながわサポートドック」の回答率はどうなのか。

→回答⑤金澤教諭(生活指導 G)

・ほぼ全回答。

北瀬様(川井地域ケアプラザ所長)

○家庭の問題などもあるが、40歳をすぎると社会の支援がほとんどなくなる。そのまえに支援先に繋げることができ
る手立てが必要。誰に相談すればいいかのハードルが高い。

金澤教諭(生活指導 G)

○本校の生徒は先生や保健室などで相談できる。担任でなくとも話せる先生を見つけて相談することができる。

梅田校長

○この学校の先生は親身になる先生が多い。学校によっては先生と目を合わせない生徒もいる。外部機関と連携し
ている学校もある。

増田様(旭ロータリークラブ)

質問⑥SC,SSWとは。

→回答⑥梅田校長

・SC(スクールカウンセラー)は心理面のサポート、SSW(スクールソーシャルワーカー)は福祉の専門家。毎日では
人員不足・予算不足のため週一回。主に相談室。リラックスできる空間。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

質問⑦相談件数や内容の傾向は。

→回答⑦金澤教諭(生活指導 G)

- ・数というより、内容が重いものが多い。昔は友達とのトラブルレベルであったが、最近は深刻化している。外部機関につなげるような重いものが増えている。

佐々木教諭(キャリア支援 G)

○出口指導だけでなく、10年後を見据えたキャリア形成ができるよう名称変更した。出口指導について、3年生は、よく考えてくれたと思う。49期と50期を比較して、50期は一般受験で青山学院大学、中央大学が出ている。一方で多くは指定校推薦で、進学している。ここなら行けるだろうという発想をしている生徒もいる。一般受験で高みにチャレンジできる生徒を育てていきたい。1年で夢ナビプログラムを実施した。生徒の興味関心を広げ、いろいろな視点から物事をとらえることができるプログラムである。

渡邊様(産業能率大学入試企画課長)

質問⑧いつごろから学校を絞って考え始めているか

→回答⑧佐々木教諭(キャリア支援 G)

- ・早い子は2年生の終わりで。大体は3年生の1学期から。昨年の指定校の一覧を見ながら考え始める子が多い。

渡邊様(産業能率大学入試企画課長)

質問⑨文系、理系の割合は。

→回答⑨佐々木教諭(キャリア支援 G)

- ・理系が一クラスを少し超えるくらい。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

質問⑩文系、理系が分かれるのは2年からか。その前に文理を考える工夫として具体的な学校を見に行くなどしているか。

→回答⑩佐々木教諭(キャリア支援 G)

- ・1年生で適性検査を行うところからスタートしている。そのためにオープンキャンパスに行くことを夏休みの課題としている。以前大学に行かせることもあったが、効果について疑問がありペンドィング中である。

深見教諭(広報 G)

○地域との協働について。昨年度の指摘を受け、あさひだよりの情報量を増加した。来年も引き続き発信していく。載せる行事などが多いので毎月充実できた。

○地域との交流については、地域貢献として清掃を行ったが、お褒めの言葉と、苦情の言葉もあったので教員の対応もしっかりと行う。これまで関わってきた地域連携が多い中、新規参入として地域の夏祭りに新しく軽音楽部が参加することができた。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

質問⑪部活動が盛んだが、それを通じた地域連携はあるか。

→回答⑪深見教諭(広報 G)

- ・旭カップとして、地域の小学生のチームに声をかけ、教えてあげたり練習風景を見せたりしている。サッカーチームと女子バスケットボールが参加している。

質問⑫文化部は。地域の人が入りやすい活動はあるか。

→回答⑫深見教諭(広報 G)

- ・本校の生徒が地域に行っての交流はしている。吹奏楽部と軽音楽部が地域に出かけ演奏している。学校に呼んでの活動はしていない。

→回答⑬渡辺教頭

- ・地域ケアプラザで吹奏楽部がクリスマスコンサートなど行っている。また、野球部とテニス部が三ツ境特別支援学校と「ビリーブ」として交流し、ボッチャなど行っている。
- ・東日本大震災のチャリティを通して、演奏の技術だけでなく、震災を知るきっかけとなり、忘れてはいけないという思いを持った生徒がいた。

→回答⑭北瀬様(川井地域ケアプラザ所長)

- ・小学生のとき高校生にダンスを教わった生徒が成長して、今度は教えるという循環ができている。

質問⑮部活に入っていない生徒は。

→回答⑮深見教諭(広報 G)

- ・生徒会など

市川様(希望ヶ丘幼稚園長)

質問⑯自主的ではなく主体的な活動とは何をしているか。

→回答⑯深見教諭(広報 G)

- ・活動経験が少ないので、意欲は持っているが、新しいことを作り出すのは難しい。裏から調整しながら行っているのが現状である。

高野教諭(管理運営 G)

○廊下の照度のアップなど環境の管理としてもの面から生徒を支えている。PTAの方にも協力してもらい、大掃除でも手が付けられない昇降口や、Aコースなど清掃活動をしている。

○ICTに関しては近年アクセスポイントも整備が整ってきたので、教務 Gとも協力しながら進めていく。課題としては、10台ほどモニターとクロームブックの連携がうまくできない機種がある。少しでも長く使う、丁寧に使うという意識で行っている。

深見教諭(広報 G)

○学校説明会のべ4000人。アンケートより95%の肯定的な回答が増えた。第一回は瀬谷公会堂、第二回は学校の新しい体育館にて行った。本校の特色として生徒が主体となっている点が中学生、保護者によい印象になっている。しかし、入学希望者数が今年度少なかった、説明会に行きたい=学校に行きたいになつてないため来年度への課題としたい

市川様(希望ヶ丘幼稚園長)

質問⑯息子の同級生から聞いた話では説明会が満員で参加できなかつた中学生も多いので、定員や回数を増やせればよいのではないか。

→回答⑯梅田校長

・中地区の受検者数減っている。横浜北部が増えている。相鉄が伸びたことの影響もあるのではないか。

新井様(PTA 会長)

○PTA クリーンアップ大作戦ではボランティアの生徒も多く、一生懸命やってくれて感動した。

4. 閉会

○学校運営協議会(14:40~14:50)

1. 開会

2. 報告

渡辺教頭

○「あさひアワード」について報告する。今年度は前回の3名に加えて1名、計4名を表彰した。

3. 閉会

令和6年度 第3回 教育活動活性化部会

令和7年3月 12 日(水)15:00 ~ 15:30

神奈川県立旭高等学校 応接室

○教育活動活性化部会(15:00~15:30)

1. 開会

2. 報告

佐々木教諭(キャリア支援 G)

○スタディサプリについて

- ・教科により使用頻度等が異なる。
- ・生徒の使用感は、年度当初は高いが、年度末では使用頻度は低下している現状。
- ・学校全体では使用効果について検証の過程。
- ・スタディサプリの活用方法については不明確な状態でスタートした。
- ・来年度からは新1年生のみ加入必須、他の学年は希望制。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

○スタディサプリの代金について

- ・入学当初は3年間使用していくという説明をしたのか。
- ・在学生に変更点について説明したのか。(希望する生徒のみ料金の徴収など)
- ・スタディサプリの導入とその活用実績について開示する必要がある、導入と結果の検証をすべき。
- ・目的の明確化、授業の補助という考え方+応用力をつけたい生徒への働きかけなど。
- ・どの科目で使用しているのか。焦点を絞って、目的を明確にして導入・説明すべきだと思う。

田中教諭(教務 G)

○学習環境について

- ・ICT の活用と本来の授業のあり方について(原点回帰)
→具体)英語の授業、基礎学力の定着、学力の低下(学習指導要領の改定)英語は個人差が大きい。
- ・授業展開
→ICT の活用、タブレット端末、バッテリー問題など、端末を使わせる環境を整える必要性。

高野教諭(管理運営 G)

○タブレット端末について

- ・使用目的が問題(ゲームなど)
→学校では充電は許可していない、今後の整備が必要。
- ・地域とのつながり(PTA だけではなく)
→生徒と地域の結びつき、地域に愛される生徒、地域を理解することの大切さ、学校の活性化へ。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

○総合的な探究の時間における地域連携について

→やっていない、修学旅行における地域研究にとどまり、旭高校周辺の地域までは落とし込めていない。

・3年間の探究活動の時間の中で、コンソーシアム等の活用をすることで地域連携を深めるべき。

→地域商店とのかかわり、地域防災という観点、「(地元企業との関係) × (探究活動)」。

→いろいろチャレンジしてみるべき。

渡邊様(産業能率大学入試企画課長)

○タブレット端末

○ロイロノートの活用への感想

○学力差への意見

→自由進度学習の取り組みについて、全国的な取り組み。

○探究学習について

→総合型選抜における探究学習の重要度が上がっている。

小宮様(横浜薬科大学教職課程センター教授)

・地元企業との連携強化すべき、探究活動

→大塚製薬やセブンイレブンとのコンソーシアムを活用することで、進路のきっかけにもなる。

→大塚製薬はフットワークが軽い。

新井様(PTA会長)

○タブレット端末について

→必要性の問題。

○地域とのつながり

→町内会、小学校中学校高校、声がけする機会がある。イベントへの参加。

→中学校の地域防災、おにぎりづくり。

→高校、ボランティアの進め方。

○防災

→緊急時に対応できるように、地域と連携するべき。(ボランティアなど)

市川様(希望ヶ丘幼稚園長)

○防災について

→TKB、横浜市の取り組み、物の提供、高校生から理解を深めるべき。

○タブレット端末

→タブレット端末の使用頻度等について可視化して活用度を保護者に示すべき。

→家庭学習について、数年前には低下していると話を聞いていた。

○「(地域) × (探究学習)」

→子どもたちの興味・関心、実際に行動させてみる、子どもたちの学びにつながる。

→SC、SSWとの会話から、探究活動を通して、生徒に変わるきっかけを与えられる可能性がある。

3. 閉会

令和6年度 第3回 地域連携部会

令和7年3月 12 日(水)15:00 ~ 15:30

神奈川県立旭高等学校 会議室

○地域連携部会(15:00~15:30)

1. 開会(渡辺教頭)

2. 報告・協議

渡辺教頭

○川井地域ケアプラザでおこなったチャリティーコンサートは、参加した生徒も喜んでいて、また機会があればやりたい。

川瀬様(川井地域ケアプラザ所長)

○ビリーブなどで連携している、また母校であることもあり、身近に感じている。学校と連携してもらい感謝している。

○地域の中でのケアプラザの役割。ケアプラザを知ってもらうことで、各家庭で問題や悩みがあった際、行政では相談しにくいことなどをケアプラザで担う。各家庭で問題や悩みを行政に相談に行くのはハードルが高いがケアプラザなら行きやすい。

○現在川井地域ケアプラザは、小学生・中学生が利用している。親の状態が悪くなったときや生活に異変があったときに駆け込めるところとしてケアプラザを使うことができる。また、駆け込みの相談場所にするためには、顔見知りの大人をつくることが重要であり、そのためにかかわりを持っている。

渡辺教頭

質問①学習サロンのペースについてはどうか。

→回答①北瀬様(川井地域ケアプラザ)

・学習サロンの現状として、主に小学生(中学生)が遊んでしまっている。高校生に来てほしいと思っているが、勉強を教えてもらうためではなく、遊び相手として来てほしいと思っている。しかし、そのような態度は適切ではないため、複数の大人が関わって環境を整え、より良いものにしていきたい。現状で高校生にボランティアに来てもらっても勉強しない。来年度には環境を整え、学習態度が整ってからボランティアをお願いしたい。

渡辺教頭

○他の地域連携としては、阿部さんから選挙ボランティアを紹介してくれた。また、今年度は上川井小学校で非行防止活動(寸劇)をおこなった。昨年は、私自身もスーパーの店員役で万引きが犯罪であることを伝えた。地域の小学校や施設でボランティアをすることで、様々な学びがあったことを参加した生徒の感想を通じて感じた。今後もボランティア・地域貢献をどのように広めていくかが課題。

金澤教諭(生活指導 G)

○学校運営協議会で話していた、40歳未満の方が高校を卒業しても頼ることができるところについて。このまま卒業しても大丈夫か?と思う子たちが多くなってきている。具体的に社会の中で就職や生活ができない人に対して何か知っていることがあつたら教えて欲しい。

川瀬様(川井地域ケアプラザ)

○実際にケアプラザでも40歳まで働けなく、引きこもりになってしまっているものがいる。二俣川に40歳以上で手帳を持っていない人も活用できるところがある。保土ヶ谷にも支援センター・ヤングケアラーの支援センターがある。特定疾病があるか、介護支援がないと受けることができない方たちの親が急に亡くなってしまったときに頼ることができる場所(居場所)や就職失敗や精神疾患がある人に対して、サポートできる環境(施設など)を地域で作っていくことが望ましい。

○現在国は、不登校などを非常事態としている。高校生なども家事手伝いをしていて、ずっと家にいる子たちも多く、不登校扱いになってしまっている。そのような子たちの支援に少しでもなれば良いと思っている。苦しい状況の時に一人で抱え込まずに、本音で相談できる相手を作ることが大切。高校生と地域が関わっていく目的は将来的な支援にも繋がる大切なことである。

渡辺教頭

○今後も地域と連携していきたいと思っている。

3. 閉会